



## 説教要旨 「ゆがんだ時代に」

ルカによる福音書9章37～45節



イエス様が山を下りてきてみると、一人の男が悪霊に取りつかれた息子の癒しを願い出ます。山の麓に残っていた弟子たちに、息子の癒しを頼んだけど、弟子たちは悪霊を追い出すことができなかつたと訴えるのです。ルカ福音書9章の初めのところで弟子たちは、イエス様から、あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気を癒す力と権能を授けられて派遣され、彼らは「村から村へと巡り歩きながら、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやし」(6節) してきました。ところが彼らはその体験によって、自分自身に特別な力が備わったかのように思い違いをしたのです。この父親が訪ねて来た時にも、まるで自分の力で悪霊が追い出すことができるような思いで、この子どもを癒そうとし、結果、それを成すことができなかつたのです。

山を下りて来たイエス様は、そのような弟子たちの有様をご覧になられ、「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか」(41節) と言われます。イエス様は、授かった悪霊に打ち勝つ力と権能を、用いることができず、この子どもを癒すことができなかつた弟子たちの信仰のなさ、よこしまな思いに捕らわれた様子を嘆かれたのです。

『よこしま』という言葉には、【正しい状態ではない】という意味の他に【横の方向であること】という意味があります。(心の向きが)横を向いている。転じて【正しくない】と言う意味を持つようになったようです。神様と人間の関係性は神さまが上で私たちが下にある、この縦方向であるのが正しい関係性です。神さまと横方向の関係性であろうとすること、つまり神さまに並び立とうとする思いに満ちた時代、それを「よこしまな時代」だとイエス様は言われるのです。弟子たちに必要だったのは、この人を救って下さるのは神様であり、その神様のみ業を求める祈りです。自分は神様によって用いられるに過ぎない、という自覚を彼らは失っていたのです。神様の力を祈り求めることをせず、自分の力で何かをすることができるような錯覚に陥ってしまうことをイエス様は深く嘆いておられるのです。



(2019・2・24 説教者：稲垣真実)